

つれづれ草と女性

岩手女子看護短期大学

名誉教授(文学博士)

小松代 融

目次

◎はじめに

一、生と性に係わるもの

(第三段) 玉の杯に底なき心地ぞすべき

(第八段) 久米の仙人の話

(第九段) 女性の魅力(一)

(第一百七段) 女性の魅力(二)

(第一百十三段) 慎しむべき話

二、教養ある言動、豊かなたたずまい

(第三十二段) 風情豊かなたたずまい

(第三十六段) 思いやりある心遣い

(第三十七段) ハッとすることのあるゆかしさ

(第三十一段) 教養と趣味の一致

(第二十九段) 思い出の中の情感(沈痛なおもむき)

(第二十三段) 女房たちの雅やかなふるまい

(第二十四段) 若い斎宮の精進

(第二十六段) 人世送別の切なさ情趣(愛別離苦)

(第四十八段) 故実教養と慣行

(第六十七段) ほめられた歌人

(第一百一段) 教養と突差の処置

(第一百七十八段) 役人と女房との阿吽の呼吸

(第七十段) 琵琶の柱、周到な心配りの日常生活

三、愛情の中の女性

(第一百四段) 身分ある女性のひそやかな閑居

(第一百五段) 若き男女のつきることなき語らい

(第九十一段) 女の身だしなみ(男も)の好ましき

四、母性讚美

(第四十七段) 「くさめくさめ」と言う老婆の話

(付) 減私奉公ということ

(第五十三段) 危い命に臨んでいる吾が子への切なる心づかい

(第八十四段) 松下禅尼の言動

五、妻と女性

(第九十段) 夫婦同棲には

(第二百四十四段) いっまでも愛情を保つために

六、異開・奇聞

(第七十三段) 小野小町のこと

(第四十段) 栗だけを食う娘

(第五十段) 女が鬼になって京中に

(第二百三十八段) 訝しい女の挑戦

七、若さというものの、幼ないものへのまなざし

(第六十二段) ふたつ文字

(第二百四十三段) 八歳の少年の質問「仏」には？

◎ はじめに

前号には「つれづれ草と老人」と題した拙文を載せて頂いたが、本号では右に掲げたような題目にした。

つれづれ草は、その序文と思しきことばに本書の本質をはっきりと述べて「つれづれなるままに」「日ぐらし硯に向いて」「こころにうつりゆくよしなしごとを」「そこはかとなくかきつくれば」「あやしうこそものぐるおしけれ」とあるように、これを文学書の中で「随筆文学」に位置づけたのは、もっとも妥当であろう。

それが後の人々によって、書名も「つれづれぐさ、つれづれ種、つれづれ草、または徒然草」などと表記されたり、序文、二百四十三段と章段を区分したり、表記上からも訂正、削除、加筆らしいもので、幾たびか修正されたりして現在の多くの刊本が流布されているのを見ると、著者吉田兼好が、自分の筆になる、「退屈にまかせて、終日机に向っているもんだから、つい思いついたワケもない事ながら(順序も体系もなく)、書きつづつてみると、ナンダこれはと自分ながらヘンな気持ちになる……」

と、恐らく今われわれの手にあるほどの事は一通り書き終えた時に記したものであろう。あとで序文の位置に置かれたこの文も、必ずしも終

りを告げるものではなく、執筆中のいつの日かに書いたのかも知れない。一向に不明である。

しかも二百四十三段の内容は、長短区区であることから、学者や研究者の手によって、その記述の形態や分類が、古くから各種各様に試みられ、主張もされて、現在に至っている。それらの一々を見て、分類の分類をするということは、私などには至難であるが、多少の知名の書を漁ってみても、かえってどう処置すべきであるか途方にくれる。

分類を自己のつれづれ草理解の立ちばから施していられる方は、それなりの信じるころがあつてなされているので、可否の意見は述べにくい。

というのは、随筆とは、初めから無題のものではないだろうか。この事について自分の理想を述べてみよう。これこれの現実を批判したいなどと、さまざまの要求を小説や戯曲や詩歌で表現してみる。これらは受ける側にもそれなりの用意や感動の個性がある。ところが、ことに兼好の本書は、人間の老若男女、幼老のこと上下貴族貧富、在俗出家、晴雨、暑寒、慣習、現実を肯定または否定、可と不可の両立、など、一つの立ちばで、すべての複雑きわまる一生百般の事象に、あるいは時流に賛し、反対し、どこに彼の本意を求めめるのか、それこそ独特の領域があつて、何と分類し何と纏めるのが妥当なのか、あまりの多様さにおどろくばかりなのである。この内容については夙に内海弘蔵教授が、つれづれ草の本旨は趣味論だとしめくくっているが、一つの見解である。

そういう多岐な内容を心の赴くままに書きつけたのだから、本書の主眼本旨など、改めて詮索することが、どういう意義があるのかと感ずる。多くの分類の中に「老人」を取りたてたり、「女、女性」を分類してあるものは、あまり見当たらないが、女・女性についての章段をそのつもりで

当って見ると、見おとしもあるか知れないが一分類と項を立てるに不足しない約三十段ほどある。

私のような見解の狭い老人が、本書の中から見出した兼好の女・女性観は、いわゆる「そこはかたなく書きつけられ」ば、およそ以下のようなものである。

このような分類もあるし、その他にも幾つかの方式があつてよいことだと思ふ。順序についても訝しいと思われる方もあつてよいと思ふ。

いずれ、これだけの章段を通じて驚くのは「堅固・信念・忍耐」など修身的なものから、「頼母しき・床しき、さわやかさ・楽しさ・怪しき（不思議さ）口惜しさ・寂しさ・哀れさ・悲しさ・いとしさ・やるせなさ・もどかしさなど、また主に男性側からの女性観が主であるのは当然としても両性に拘わる性情の自然性（共通性）、など同不同、各般の人間に触れているのには驚くばかりである。その他、「自然」現象と「自然と人生」観などは別にまとめてみたいほどの数がある。

備考 資料として「橘・慶野両氏共編の要注新校つれづれ草（武蔵野書院）」を使用した。

採つた章段の文章中、假名遣いに「新かな遣い」に改めた。句

読点は随時改めた。文中圏点は、私が打つたもの、カッコ内は

〔解説、補説など〕私が加えたものである。

一、生と性に係わるもの

兼好の筆力の勝れていることは言うまでもないが、その執筆の態度はそれに加えて一段と慎重である。二百三十四段全段の行文を繰り返して見るに、終始穏やかな心境で誠実に文章を綴っている。筆を勢いに任せずて本旨を逸脱するような失態など、どこを探しても見当らず、長短とい

わず終始充実した心境で書き上げたという印象をうけるのであるが、中にも男女間の問題などを記すのに、行文の語句には一言一句慎重な筆遣いをしていゝるのには驚嘆のほかはない。

さて、人生とは生と死と性と微妙な組み合わせの複合体であるとも言えるが、成熟した男女は相互に魅力を感じるのが自然で、第三段に「よろずにいみじくとも色好まざらん男はいともうぞうしく、（さびしく）玉の杯の底なき心ちぞすべき」と言い、「相手を求めて、よる昼うろつき廻り、親の忠告も世評にも反省の様子もなく、あれこれ思い乱れて……しかし、痴情までは至らず、相手の女にはよい人よと思われようなのがよいなあ」と言っているのなど、現代でも好ましいではないか。これなどは男側からの気持ちであるが、兼好は第八段には

世の人の心惑わすのは色欲が第一だ、人というものは愚かなんだな。匂いなど着物にたき込めた假のものなのに、何とも言えない匂いにはどきどきするものだ。だから「久米の仙人が洗濯している女の脛すねの白いのを見て、通力を失って空から地上に落ちたという話は、ほんとに、女性の手足皮膚など綺麗に肥えた体軀の魅力には、同じ色でも色が違うからね（参つてしまったのでしよう）」とある。

このつれづれ草の一件から、江戸時代の川柳は多くの作品を出しているが、兼好はおちついて結んでいる。

女性の魅力は肉体の豊満、豊麗なのが有力で世界の名画がそれを証している。

続いて第九段は、女性の魅力について、

髪かみのよい（いろいろな点）のが、男の目に止まる。しかし、心のあり方などは、ちょっとした物言い、物越しからでもわかるものだ。何事を

するにも、何気ないふるまいでも相手の心を動かしたりして、総じて女が気を許してぐっすり眠りもしないで、身を犠牲にしても堪え凌ぐは女性らしさの保持の念があるからだ。

このような行動「愛着の道」は、「その根深く源遠し、六塵の樂欲多しといえども、皆厭離しつべし。そのなかに、ただかの惑いの一つやめがたきのみぞ、老いたるも若きも、智あるも愚かなるも、変る所なしとみゆる。」と。

強力な女性の引力の根源は、人の教えで止めることができない。だから「女の髮筋でよった綱には、大象もよくつながれ、女のはける足駄にて作れる笛には、秋の鹿必ず寄るとぞ言い伝え侍る。みずから戒しめて恐るべく、慎むべきはこの惑いなり。」と云って、

男性側からの女性の魅力は人の生の根源的な引力であるから、人為的な宗教や教育など超越したもの、大事なものの故に十分の批判を以って破滅の淵から顛落しないようにすべきだと言っているのである。

この、人の性に関する見解は兼好の独自の見解であるとは思われないが、宗教や教育が補い足して人生を整えようとする人間の願いには限界のあることをこれらの言説の内に蔵して冷静に生活すべきことを冷静に説いているところに兼好の眼力が窺える段であると思う。

女性の特色を男性側から視ると、さまざま「これは」と思う事態のあることについて、第七段は次のことに言い及んでいる。もちろん兼好の心に写った現象についてである。

「女が話しかけたとき、それに適合する返事をすぐにする男は、案外に少ないものだよ。」というので、龜山天皇の時（一三〇五崩・五十七歳）、ふざけた（或は茶目っ気の多い）女房たちが若い殿上人たちが出仕する

ごとにつかまえ「ほととぎすをお聞きになりましたか。」と、試問したときに、某大納言は、「もの。の。数。でも。ない。私。です。ので。聞いて。い。ま。せ。ん。」と答えられたが、堀川の内大臣さんは、「岩倉で聞いたたでしようか。」と仰言いましたのを、「この答えは無誰である。」「数ならぬ身というのは少し凝りすぎたかな。」などと批判し合った由、やんちゃ女官たちが、殿上に乗って、少々のぼせ気味のところへの奇襲攻撃を加えられたので、さすがのお坊っちゃんたちもドギマギしたに違いない。女性たちにも場合によるとこんなこともやるワザを心得ているものだ。

そんなことを構えて兼好は次例を直ちに採りあげている。

「総じて男を育てるには、女に笑われないようにすべきだ」ということである。それについて、浄土寺の前ノ関白殿（藤原忠教、一三三二年没）は幼い時、安喜門院（母上）がよくお教えになったので、お言葉などがよろしいとある方が仰言ったとか。

また、山階の左大臣殿は、「賤しい下女が（自分を）見ている時でも、ひどく気がおかれて、はずかしく気づかいされる。」と仰言っている。（こんな例を見ると）女のいない男ばかりの世の中だったら、衣紋も冠もどんなかっこうであろうと構う人もないであろう。と女性への遠慮、心遣いは並並ではなかったようだ。

さあ、それでは、このように男に恥かしい思いをさせる女とは、どんなに素晴らしいかというに、（以下はかなり辛辣なことばで数項並べている）第七段の後半に

女の性は皆ひがめり。

人我の相深く、（自他の区別が厳しい）

貪欲はなはだしく、

物の理を知らず、

ただ迷いの方に心も早く移り

ことば巧みに、苦しからぬ事をも問う時は言わず。

用意あるかと思れば、また、

あさましき事まで、問わず語りに言い出す。

深くたばかりかざれることは、男の知恵にも勝さりたるかと思えば、

その事あとよりあらわるるを知らず、すなおならずして、つたなきものは女なり。

その心にしたがいてよく思われんことは心憂かるべし。

されば、何かは女のはずかしからん。

もし賢女あらば、それも物うとく、すさまじかりなん。

ただ、迷いがあるじとして、かれにしだかう時、やさしくも、おもしろくも覚ゆべきなり。

と徹底的に女性の減点分を挙げて、ごたごたする男女間の問題を解決

すべき主眼点を指示しているように見える。

女性非難の評言は、この段のほか第百九十段にもかなりの批判がある。この段を心に止めておいて以下に見える諸段と思ひ合せられたい。

なお性にまつわる事で、今一件記しておく。第百十三段の前半に

「四十にも余りぬる人の、色めきたる方、おのずから忍びてあらんはい

かがはせん。こと(言葉か)にうち出でて、男女の事、人の上をも言い戯ぶる

こと、似げなく、見苦しけれ。

この例は現実的であるかどうかはさて置いて、現代でも四十過ぎの男

たちが、女関係で蔭で語るのはやむを得まいが、それを臆面もなく言い

出したり、その向きの他の人の噂まで冗談にでもするのは、似気なく見

苦しいものである。

性は生であることを考えると、永い人間の歴史の中で作りあげた秘事を、本能だからと言って大っぴらに言動するのは、人間の善意を冒瀆するものであろう。

この後半に、聞き苦しい事見苦しいこと、「老人が若い人に交って、面白がるだろうと饒舌ったり、賤しい身分の者が、今、世間的に評判の高い人を仲間あつかいの言葉を用いたり、貧しい所で、酒盛りなど催して客人をもてなそうとしている。」

などをも見苦しいこととしている。

現代の日本女性の権利と自由の、男性と同等に扱われる社会の、お互いの話題はどうなっているであろうか。

二、教養ある言動、豊かなたすまい

人の言行は、どこまでが「教養」で批判されるものであろうか。兼好は、第三十二段において、「九月二十日ごろ、あるお方のお誘いを受けて、夜が明けるまで月を見歩いていたことがあった。なにか思い出されたことがあったと見えて、あるお屋敷に入られた。荒れた庭は露一杯。香の匂いがしんみりと自然に漂う屋敷内にひっそりと住んでいられる様子がいかに情趣豊かであった。しばらく時を過して出られたが、ありさまがひどく優雅に感じられたので、しばらく物蔭にいて様子を見ていたが、(そのあるじの人が)戸を開けて月を見ている様子である。(相手に覚られないような形で実際は見送っているのだ)、送り出したあと、すぐに家の中に引っこんだ味が無いし、そのお方も別れた後で見送っている人のいることに気付くまい。このような、ほんとうの心遣いは、日常の心遣いの積み重ねで、自然に行われるものである。(その屋敷の人は女性と思われる)間もなく亡くなられたとのことである。

とある。名を示さない、夜が明けるまで月を眺めて歩き廻ったということも、ちょっと尋常でない感じだが、当時のよき人達には別段に取りたてるほどの行為ではなかったらしい。

第三十六段には、やはり女性らしい心遣いのほのぼのとしたものを感じさせる短文である。

兼好が左の文の末尾に同感の「…さもあるべき事なり。」と結んでい

る。「久しく訪れぬころ、いかばかり恨むらんと、わが怠り思い知られて、言葉なき心ちするに（言いわけの言葉に窮している時）

女の方から（無沙汰を恨むどころか）「仕丁やある、一人」など言いおこせたるこそ、ありがたく、うれしけれ。「さる心ざましたる人ぞよき」と人の申し侍りし、…

兼好の体験談ではなく、人から聞いた話に同感の意を添えた文である。心の中では音沙汰のない相手にならぬ焦れたい気持ちがあったかも知れないが、そんな素振りには全く見せないで、（例えば「随分ごぶさたです。さて…」などと厭味な一言もなく）あっさり「あの小使さんを一人雇いたいんだけど」と言うのなどはすぐれた心づかいである。やはり心が日ごろ鍛えられ、喜怒哀楽を抑制する態度ができていて女性が望ましいと、考えていたのであろう。

続いて、第三十七段は

朝夕へだてなくなれたる人の、ともある時、われに心おき、ひきつくろえるさまに見ゆるこそ、「いまさらかくやは」などいう人もあるべけれども、なおげにげにしくよき人かなとぞ覚ゆる。うとき人のうち

とけたる事など言いたる、又、よしと思いつきぬべし。

これは、前段に続いていると思われ、内海教授は「ここに出ているはじめの人は、友人でも何にしても解けるが、やはり女を対象にして書いたものであろう」と言われ、橋教授は、「朝夕隔てなくは妻を指す」と示されている。

この段は、かなり微妙な関係も考えられるので、兼好の趣味の内容は截然と定めがたいが、

常日ごろ親しんでいる女が、何かの時に、自分に遠慮して、身だしなみしているように見えるのは、今更そんな…」という人もあるだろうが、やはりそういうのがほんとうの教養を積んだ人だなという感じを書き留め、また、これとは違って、ふだんなれなれしくしていない女が、打ち割った話などをしたのは、これもよい人だと強い印象を受けるに相違ない。

ということである。

少しく戻って第三十一段を採ってみよう。

このような文章になると、趣味と教養一体の感じで、しかも、さしもの男性も一本参ったが、そのゆかしさにひどく感動したという段である。

雪のおもしろうふりたる朝、人のがり言うべき本ありて文をやるて、雪の事も言わざりし返事に、「この雪いかを見ると、一筆のたまわせぬほどの、ひがひがしからん人のおうせらるる事聞き入るべきかは、かえすがえしくち惜しき御心なり。」と、言いたりしこそおかしかりしか。今はなき人なれば、かばかりの事も忘れがたし。

とある。京都は雪の多い市街で、枕草子などにも春先にあっても庭に

雪が残っていることが記され、とくによき人たちの観賞の対象とされていたことは周知のことである。

雪がしかるべきほどに降り積った朝に、女人のもとに用事があったので手紙をやる時に、(私もうっかりして)雪のもように一言も触れなかったその返事がふるっている。「この雪景色を(見られたはずなのに) どうだったと一筆も記されないぐらい無風流没趣味ボンクラ無教養のアナタなどの仰言することは聞きいれるのですか。ほにほに。(盛岡弁)ほんとうに、または、つくづく)なさけないお心もちですネ。と言う返事であったのが、ひどくおもしろい失敗談であった。しかもその方は故人となっていていられるので、こんな小さな話も忘れがたい思い出である。

兼好もこの逆襲に失敗を反省したが、その相手の女性の趣味豊かな生活と親愛の情をこめたいいきいきした態度に感心もしたろう。私も同感である。

なお第二十九段は前段の快活な話題と変って、一転して沈痛な趣きを感じさせる文である。

静かに思えば、よろずに過ぎにしかたの恋しさのみぞせんかたなき。人静まりて後長き夜のすさびに、何となき具足(諸道具)とりしため(整理し)て、残しおかじと思ふ反古(まご)など破り棄つる中に、亡き人の手習い、絵かきすさび(慰み)たる、見出でたるこそ、ただその折の心ちすれ。このごろある(生存している)人の文だに、久しくなりて、いかなるおり、いつの年なりけんと思は、あわれなるぞかし。手なれし具足なども、心も無くて変らず久しき、いとかなし。(はなはだ切ない心持ちになる。)

とあるが、「亡き人」が、もし異性であるとすれば、その思いさらに痛

切な念に駆られるであろう。

なお第二十三段には、宮中で夜分の会議が開かれときの伝統的な用語など、経験豊かな女房たちが、それぞれ伝令をしているさまなどさわやかな感じを

(第二十四段には)、齋宮(い)の野(の)の宮(みや)においてになっている時のご様子は、これ以上のおもしろさはないと思われた。(伊勢神宮(い)に奉仕する内親王(ちか)―伊勢神宮(い)にくだる前に、一年間(いちねん)身を清めるために生活される所、京都(きょうと)の嵯峨(さやま)に建てる由)

いかにも、みやびやかでゆかしさを、

第二十六段は、特定の女人を指すのではないが、人生の愛別離苦の心情を、兼好が得意とする雅文をもって記した数少ない例文の一

その末尾に堀川院の百首の歌の中にある「むかし見し、いもが垣根は荒れにけり。茅花(つばな)まじりの董(すめ)のみして」を挙げて、その心境に同情して、そのような事もあったでしょうと述べている。男女の仲らいにかかわることである。

以下の数段は教養ある女房たちのエピソードとも逸話ともとれる文である。原文を添えるのが最も手近かで理解し易いが紙幅に限りがあるので簡略化して述べる。(あえてここで言いわけをしておく)

第四十八段に

藤原光親卿が、鳥羽院の最勝講奉行をされるとき、院の居間でお食事を与えられた。その時、光親卿はさっさと食べられて、そのお膳(さん)方を、簾(すだれ)のうち側に入れて退出してしまった。女房たちが、「誰に始末しろ」というのだろうと口々に話していると、院がその話を聞かれて、

さすが故実に通じていられるだけあって、その処置は作法にかなったものだと、くり返しおほめになったという話。

この話では女房達の宮中における古い慣習までは心得ていなかったことの話だが、第六十七段になると、

加茂の、岩本、橋本は業平、実方（を祀った社）なり。人々が誤って言っているので、老いたる宮司に聞いたら上の通りであった。さて、今出川院の近衛と言う人で勅選集などにも多く入っている方が、若い時に百首の歌をよんで、かの二社に手向けられた。まことに立派な歌人として、人の口に読まれていた歌が多い。作文（漢文）詩序なども立派に書く人である。

と述べて賞讃している。

第一百一段には、（とくにくだけた表現で記すと）

或る人が大臣の任命式の時、辞令交付役を勤めていたが、担当の役人が持っている辞令を受けとらないまま壇上に昇ってしまった。とんでもない失策なのだが、戻ってとってこるわけにもかず、苦慮しているときに、六位の外記（書記）康綱（知名の外記らしい）が、衣被（余り身分の低い女房が、白い絹地の布を頭から着るうわっぱり）の女房に話をつけてその辞令を持たせてそっと差上げさせ（無事に）済ませた。この緊急の処置はじつにすばらしかった。

と述べているが、これは、外記（男）と衣被の女房（女）との合作で、女だけの働きでなく、「阿吽の呼吸」もあった例であろうが、第一百七十八段に見える曲侍（内侍所勤務の女官）など故実に明るい説明には、日ごろの心得の、いかにも専門職らしい自信に満ち、たのもしい感じがすると兼好は観察している。

それは、

ある役所勤務の役人たちが、お鏡を奉安している内侍所で、十二月に行われるお神楽を見て、人にその様子を話す時に「宝剣は何某さまが持っていたら。」などと言うのをみ簾の内において、その話を聞いていた女官たちの一人が、「別殿にお出ましの際に奉持するのは、夜の御殿に奉安する宝剣ではなく、書の御座（清涼殿）の御剣なのに……」などと、しかも、こっそりと言ったのは、ゆかしかった。その人はずっと前から典侍（内侍所の次官）であった人なそうだ。

とある。

兼好の役職は官位からはそう高くはないが、交際が広かったらしく、宮中の内外の情報を得ているようだった。ここ数段は女房たちの、気の遣い方に、専門的な知識を駆使しているさまを挙げているが、次のような例もある。

第七十段に

元應年間（後醍醐天皇一三三〇—一三三五）ごろ、清暑堂での音楽会に（―その時は第一の名器「玄上」は盗まれていた……後に発見される）、そこで第二の名器：「木馬」を、菊亭の大臣が―琵琶の名手―弾かれた。その時、座に着いて、まず柱を探られたところ、一つがぼろりと落ちた。大臣はお懐に、続飯をもっていられたので、それで柱をくつつけたので、神様へお供えものが揃う間に、よく乾いて、無事に終了した。どんな意趣があったのだろうか、この会に出席していた衣被（の女）が、始まる前に琵琶を置いてあるところに寄って来て、柱を剥がしてもどのようにしておいたのなそうだ。

とある。市井の女人と見える。音楽会に対してか、大臣に対してか、遺恨は何なのか、一切ふれていない。

この段については、橘教授は兼好の真意について、菊亭の大臣の周到

な用意が、事を安らかに運んだことを説き、進んで奇蹟、事件などというものは、どこにも、いつでも起こる可能性のあること、これを防ぐには、ただ生活が一筋、道を修めることにあると言いたいのであろうと言っている。

三、愛情の中の女性

諸外国の男女の交際振りは一向に心得がないので何とも述べることはに窮するが、私などはわが国では五十年ほど前までと、以後との在り方は激変、一変、まさに革命的変りようとしているが、五百年以前のわが国の様子も、多分五十年以前の私などの見聞や行動とさして変わったものではないに思われる。もちろん現代でも、その風習が時たま見られるのも周知のことである。

次の段と第百五段は、数少ない雅文で述べており、読むだけで、よいなことばを加えては物笑いになるだけだと思うので、一切控える。ただ場面は貴族の邸宅か別邸、高貴の身分の然るべき男が、睦まじい婦人との語らいとその周辺の情景で、一切を想像に任せた行文、他は、年たけたかなりの身分の男女が敷居に腰をおろして睦まじい話をしているのをやはり雰囲気之を守り立てて、おちついた情景を描きあげている。

(第百四段) 荒れたる宿の、人目なきに、女のはばかり事あるころにて、つれづれとこもりいたるを、ある人、とぶらい給わんとて、夕づく夜のおぼつかなきほどに、忍びて尋ねおわしたるに、犬のごとくしくとがむれば、下衆女の出でて「いづくよりぞ」というに、やがて案内せさせて入り給いぬ。心細げなる有様、いかで過すらんといと心ぐるし。あやしき板敷にしぼし立ち給えるを、もて静めたるけはひの、

若やかなるして、「こなた」という人あれば、たてあけ所せげなる遺戸よりぞ入り給いぬ。内の様は、いたくすまじからず。心にくく火はあなたにほのかなれど、物のきらなど見えて、にわかにしもあらぬにほい、いとつかしう住みなしたり。「門よくさしてよ、雨もぞ降る。御車は門の下に、御供の人はそこそこに」といえば、「今宵は安き寝はぬべかんめる」とうちささやくも、忍びたれど、ほどなければ、ほの聞ゆ。さて、このほどの事どもこまやかに聞え給うに、夜深き鳥も鳴きぬ。来し方行末かけて、まめやかなる御物語に、このたびは、鳥も花やかにうち頻れば、明け離るるにやと聞き給えど、夜深く急ぐべき所の様にもあらねば、少したゆみ給えるに、隙白くなれば、忘れがたき事などいいて、立ち出で給うに、梢も庭も、めづらしく青みわたりたる卯月ばかりのあけぼの、艶におかしかりしを思し出でて、桂の木の大なるが隠るるまで、今も見送り給うとぞ。

(第百五段) 北の屋かげに消え残りたる雪の、いとう氷りたるに、さし寄せたる車の轆も霜いたくきらめきて、有明の月さやかなれども、くまなくはあらぬに。人ばなれたる御堂の廊に、なみなみにはあらずと見ゆる男、女と、長押しにしりかけて物がたりする様こそ、何事にかあらん、つきすまじけれ。かぶし、かたちなど、いとよしと見えて、えもいわぬにおいの、さとかおりたるこそおかしけれ。けはいなど、はつれはつれ聞えたるもゆかし。

以上の二例は、高貴の社会の男女関係を、むしろこうもあろうかという感想が強いが、次の第百九十一段の「夜は昼と違って特別の美が発見される」と強調しているが、その後半に連想したのであろうが、

さして異なる事なき夜、うち更けて参れる人の、清げなるさましたる、いとよし。若きどち、心とどめて見る人は、時をも分かぬものな

れば、ことにうちとけぬべき折節ぞ、褒晴なくひきつくるわまほしき。よき男の、日暮れてゆするし（髪のかせ毛を直す）、女も、夜ふくるほどにすべりつつ（ちょっと退座して）鏡とりて顔などつくり出て出ずるこそおかしけれ。

とあるのは、「男のおしゃれ」が、この頃とくに青年間に大はやり、頭髪を洗ったり染めたりで、古い男などにはいささか奇異の感がする。こは女の身だしなみも併せて、兼好は、すこぶる好意の眼で見ているようである。

四、母性讚美

兼好の女性を見る目が、母・母性の本領とも言える事柄になると、涙ぐましいほどにことばをつくしてほめ讃えているようだ。以下三段ほど採りあげる。

（第四十七段）（付、滅死奉公ということについて）

ある人が清水寺にお詣りする途中、一人の老婆と道連れになった。道すがらその老婆は、「くさめくさめ」言っている。なぜそんなことを言うのかと尋ねても返事もしないで、やはり言いつづけている。いくども尋ねるので、その老婆さんが、腹をたてて、「エエイ！（うるさいなあ。）私がかうお呪をしないと、私のお育てした坊ちゃまで、今、比叡山にお稚児になっていらっしやるが、くしゃみをなさった時、（誰かが代って蔭ででも）かうお呪をしないと、（なにかの祟りが当って）坊ちゃんが死ぬんだと言うことなので、唱えているのです。」と行って、すぐにまた続けて繰り返して言っていた。という話だった。お婆さん（乳母さんの、自分の乳を差上げてお育て申し上げたお稚児さまを、案じ申し上げている心遣いに、兼好は感激のあまり「ありがたきころざしなりけんかし。」

と評言しているが、クシャミ発作の悪魔（の予告）は稚児の命をねらっているのだ。寸刻の間も油断も許されない緊張の生活を、老いたる乳母は自らの生命を賭けて守っているわけだから、兼好の感銘も成るほどと思われる。

いずれ、この記事に盛られている内容は、その通りであろうが、どうも読み返してみると、はてなと思われるふしがあるので、少しく述べておきたい。

この第四十七段は実話なのかどうかということである。実話であろうと作り話であろうと創作であろうと伝聞であろうと差し支えはないのであるが、お寺預かりの「稚児と老いたる尼」との年齢差に気にかかるものがある。乳人とは女ざかり子育てのさかんな年令が想定されるが、寺に入った稚児の年令と、老いたる尼との差がありすぎるのではあるまいか。具体的であれば大して不当とは思われないのだが、この点は、この時代の風習を詳かにしない私の単純な疑問である。私は、この老尼が、外出の際にも、クシャミクシャミを唱えて止まないのは老境に入ったよく見られる一種異常な精神傾向の行為で、兼好の「ありがたき志なりけんかし」は、別な理由も加えているのかも知れないと思われる。これに少しくふれたものに

標注徒然艸新釈（渡辺弘人、明治二十六年版）に、

ありがたき心ざし。尼の、人のいふままに信をおこすをほめたり。その仕業は愚かなるに似たれど、かやうの（こと）は信じてよきと也。

（丸点筆筆者）

とあるのは、私の心に通じるところがある。

今一つは、クシャミの語釈である。私の目を通した主なものには（内海弘蔵）くさめ、今いうくしゃみ

(西尾 実) (次に) やや同じ 迷信・早口

(橋・慶野) 昔はクシャミが出た時、「休息万病」(クソクマンミョウとまじないことを唱えないと病気になるという迷信があった。その休息万病を早口にいうとクサメになる。のちにはこれがクシャミのことになった。

渡辺(前出者) はなひたる時、嚏すの字をよめり。鼻放るの義、くさめすることなり……

田辺爵(徒然艸諸注集成)

諸注「簾中抄に『はなひた折の誦、久息万命、急々如律令、くさめなどいふに是にや』とあり、蓋し、クソクマンミョウといふをつづめて、クサメといへるものにして、下にいへる如く、鼻ひる時にいふ咒言じゆんげんなること著し(山田)、これは拾芥抄、二中歴にも見え、律令家滝川博士によれば、魏晋の道家が漢代律令の威力を習合したもので、我国では山伏の間に流行したものらしい。

佐野説には、万葉、古今、袖中抄、奥義抄、大石千引の野乃舎随筆、高田与晴の松屋日記などを引いて考証してある。思うに、ハックションという自然音をこじつけたものにすぎぬ。

など、むずかしい故事まで引き出して合理的に解釈しようとしているのも見えるが、いずれにしても、このくさめを説明したとは言いかねる。終りに、「自然音をコジツケたものに過ぎぬ」は当ってはいないが新解釈に通じるものがある。

このクシャミについては、いくら漢字を調査しても仏説山伏を持ち出して、よい答えは出てこないであろう。視点を別な世界、民俗伝承の方面からまたは書冊以外の民衆の実生活から説かなければならなかったようである。これについては柳田国男氏の民俗学的方法によるのもつ

とも適合したものであったことは、もはや一般的ではないであろうか。

私は柳田氏の尻馬に乗り、生育地でのさまざまな習俗を体験し、かつ見聞しており、一二発表もしているから、ここではくわしくは省くが、要するに、昔の人々はクシャミが生理現象であることを知ってか知らないでかは、屁をひる・鼻ひるなど同じ放るでも、クシャミの方は人生人間関係の不吉な予兆を示すものと理解して、それが出た場合、即座に反撥しなければ、その祟りで病、死の厄に会うから、それに対する「俺を呪のろっている奴はダレダ、お前こそ、クソデモハメ(食え)」という洞喝の語をまじないに用いたのが始まりであろうというのが、もっとも真に近いと思われる。

クシャミは各地の方言によってみても、あの発作の擬音形容から名付けられたのは間違いではないこと、右例中渡辺氏の意見に賛意を表する。第五十三段は、仁和寺内の珍事件(一種の滑稽談としても知られているものがある。

寺内の童(稚児)が法師になる名残りとして記念祝宴が催され、酒盛も最高頂になったころ酔った勢いで、そばにあった足鼎を頭に被った。少しきつくて詰まるようなのを、鼻をおし平めて顔まで入れておどり出したので、やんやの喝采かつさい。終って鼎を抜きとろうとしたがとんと抜けない。大騒ぎの末、異形のものが人に手を引かれて、都内の医師くすしの所に行く。医師は、まじな顔をして「こんな患者は始めてです。ですから、こういう患者の治療法について書物にもないし、家伝薬もありません。と、ソツケなく見放してしまつた。

その辺までの行文は、まことに興のあるところで笑いが止まらないが、その後が、その医者に見放された異形のものがお寺に戻つてからの、

「親しき者、老いたる母など、枕上まくらがみによりいて、泣き悲しめども、聞くらんとも覚えず……めでたいお祝いが、一瞬にして地獄の悲嘆につきおとされた。中に母なる人の身も世もない深刻な悲しみは、この段では、外の者たちと共に一緒にしているが、恐らく第一等の悲しみであろう。」

ところがあつた者が、「たとえ耳や鼻が少しぐらい欠けてなくなつたとしても、命は助かるだろうから力一ぱいに引いてみる。」というので命には換え難いので、その通りにやったら、耳や鼻は欠けて穴になつたが命は助かつた。と、そして兼好は、次の第五十五段でも仁和寺の若い坊さんたちの「ハシャギ過ぎの失敗」を評して「あまり興味のあることは必ずブツコワシになるものです。」と、一件の顛末に評論を加えているのは妥当と思われる。

私はここでも視点をかかせる部分に移して、お稚児とその老乳人、鉢かつぎと老いたる母との事柄の違いと、後者の母なる人の悲しみの深さに思い到ると、これは大変な事件なので、どう同情を表してよいかわからぬほどである。

不幸の予防・災厄に会つた当時、皆の悲嘆とその程度、とても一口につくすことのできない内容を持っているものであるが、この段における「母なればこそ」でそのふるまいがまざまざと思ひ浮かべられる。

兼好のこの一見、奇妙な事件を坦坦と述べているが、実母などの身も世もない悲しみが思いやられる。

第百八十四段は、兼好がもっとも力を入れて賞揚していると推察される。女性の、慈愛の深さ、賢母としての徳行、男性にも劣らぬ処世の力量や見識など身に付けた人として挙げてゐる松下禅尼の風評の記録である。

老齡者なら、昔の修身の教科書の「儉約」などの徳目を学習した際に、

一度は出会つた話であるが、多分この段が転載されものかも知れない。「(北條)相模守時頼の母は、松下禅尼とぞ申しける。守を(迎え)入れ申さる事ありけるに、煤けたる明障子の破ればかりを、禅尼手づから小刀こがたなして切りまわしつづ張られければ」

禅尼の兄上の(秋田)城じょうの介義景、その日の接待係としておられたが、「その作業はこちらで頂いて、何とか(いう)男に張らせましよう。その男はそんな仕事が上手ですから」と申されたら、

(禅尼は)その男、尼が細工によもまさり侍らじ」とて、なお一間づつ張られけるを、「皆を張り替え候わんは、はるかにたやすく候うべし。まだらに候うも見苦しくや。」と重ねて申されければ、尼も後は、さわさわと張り替えんと思えども、今日ばかりは、わざとかくあるべきなり。物は破れたる所ばかりを修理して用いる事ぞと、若き人に見習わせて、心つけんためなり」と申されける。いとありがたかりけりと、手本となすべき理由を自ら実践していることに、並々でない着想を、立派だと賞め、続いて、

世を治むる道、儉約を本とす。女性なれども聖人の心に通えり。天下を保つ程の人を、子にて持たれける、誠に、ただ人にはあらざりけるとぞ。

と結んで、終りは世間の噂話に流してしまふ兼好の手法である。

女性―婦人と言へば一家の内を支え整えて夫の外での活動が十分完遂できるようにするのが、いわゆる婦道であるとの觀念が、すでにこの時代の社会的通念となつていたのであろう。禅尼は女性として家を固めるばかりでなく、眼を天下に向けて、今何が天下を治めるのに最重要かと案じ、それは節儉、浪費を避けることだと確信し、これを子の時頼に自覚実践させようとした見識、政策の男以上で、その大抱負を些細な実行

力によって実践して見せようと試みたこと、兼好の好む人間のしかも稀な賢い女性であることに、「……ただ人にはあらざりける」人として映じたものであろう。(と人の噂さにしても)

ただ、私が一つ気にかかることは、この障子張りのことは世間の噂話であろうと、事実であろうと、顯要の地位にある子息を迎えるに当って、そのような障子張替え一つが儉約の手段として、子息がどんな感銘をうけたかである。そこで、私はむしろ障子の張り替えは、日常、長年にわたって質素儉約の生活指導に慈愛の発現としてつくしていたが、息子が天下の執権となった今日でも、相もかわらず母としての思いやりを続けていられた一筋の道を示した一挿話ではないか、と思うのである。

時代は鎌倉幕府が源氏から北條氏に移る重大時局、時政の内室政子が活躍した数代後のことである。

現代の政治行政の、次から次へとどこに終りがあるのか不明な汚職連続の時、松下禅尼のような毅然とした賢婦人の出現を期待するのは無理であろうか。

(私は思考が単純で幼稚なせいか、この僧俗の二者の区別と現実の生活の慣習についてどうも腑におちないことがある。とくに現世の生活を避けて仏門に入り、豪華な堂塔伽藍にこもり憂き世を避けているとか、人里遠い山蔭などに遁世して心静かに余生を生きているはずの僧尼たちの生活行動を見ると、まことに千差万別であるが、現実の社会に対する発言行動が必ずしも脱俗の真意に添っていないように思われるばかりでなく、むしろ欲情に耽溺し、権力の保持、地位や富の永続を願った一方便にすぎず、真の信仰とか脱俗とか得道とかには縁のない人々であるように思われる。)

本段の禅尼の考えや行動でも、遁世者とは言い難くもっとも離脱をす

べき愛着の道から離れるべき仏門の行者の行為としてはどうなのかなあという感がするのである。

これは私の隠遁脱俗出家などの性格をかんとんに理解している不明さに由るのかも知れない。

私は右に母性讚美(四の第四七・第五三・第一八四の)と思われる三段につき読んだり解説を試みたが、いつも胸中を去来するずっと幼ない学齡初期の年頃に受けた感動がずいぶん大きく、その後の七十余年の生き方の根底の一部分になっていた記憶を思いだす。本旨から外れるおそれがあるので、きわめて概略を述べることにする。

以前はわれわれのように田舎で育ったものの慰みとするものは至って少なかったのは当然であつたらうが、その少ないものの中で、童心ながらも深い感動を与えてくれるものに、地方廻りのかぶき芝居があつた。にわか作りの假小屋で演じる芝居の外題は、まず「仙台萩」(千代萩・伊達騒動)・傾城阿波の鳴門(巡礼お鶴)そして「忠臣蔵」(いろいろ)などが定まっていた。一家が真座や食べものを準備して夕方から出掛け、早いの遅いのと勝手なことを語り合いながら夜の更けるのも忘れて見入つたものであつた。

それらの外題は、その虚実はどんなものであつたか、役者の腕前はどうかであるのかなど殆ど関知しないのであるが、仙台萩では幼い殿様が悪人どもにお家を奪れ、命をねらわれるという危急に際し、吾が子を悪者に殺される最大の犠牲(不幸悲しみ)に耐えて主家の安泰を確保した乳人の政岡、主家の再興のために盗人となっているために、娘の巡礼に会いながら親子の名乗りもできず、娘が父―夫の手にかかつて死んだ亡き骸にとり縋つて母情を口説く母お弓みの悲嘆のさま、または主君の切腹

の場に合せた家老大石蔵之助と浅野内匠頭との誓いのことばなど、観客と一体となって悲しみ涙を流し、憤り、悲憤慷慨の場面になって、幕を曳いてハッとわれに返るというものであった。

そのような見せものを、私たちは、あるいは小学校の物置きの下や馬小屋、作業場で仲間と一緒にソノ芝居を真似たりしたことも忘れ難い。いずれ、それらの、親子の真情君臣の義、とくに母の子（乳人の養い子に対するもの）に対する切々たる愛情の発露などは、それ以後の人生に無意識に大きな影響を与えていたことを自覚することが少くない。

兼好が、時代が下って、これらの事件を見聞したなら、どんな感慨を述べたであろうかなと、ありえない、できないことを私は夢想することがある。

世に慈母賢母の業績や伝説は限りなくあるに違いない。さきに記した観劇体験のほかに孟母三遷の訓など聞き囁りで知り、義務教育時代でも、近江聖人中江藤樹の親子の逸話などは涙なくしては語られないものがあった。たまたま、そのいくつかが兼好という達識者の心に止まり、記して残された今日まで、どれほど多くの日本人を自省させたかはかり知れない。その生き方を継がれた数少ない人々はまた正に選ばれた至幸の人々でもあったのではなからうか。

五、妻と女性

第百九十段はかなり思い切った意見であるが、内容には成るほど思う男性も女性も少くないであろう。約五百年以前の男女関係の一面が現代に引き継がれているような気がする。

妻というものこそ、おのこの持つまじきものなれ。いつもひとり住

みにてなど聞くこそ、心にくけれ。「誰がしが聳になりぬ」とも、又「いかなる（これこれの）女を取りすえて（迎えてきて）相住む」など聞きつれば、むげに心劣りせらるるわざなり。異なる事なき女を、よしと思ひ定めてこそ添いたらめと、いやしくもおしはかられ、よき女ならば、ろうたくして（いとしいと思つて）、あが仏とまもりいたらん、たとえばさばかりにこそと覚えぬべし。

まして家の内をおこない治めたる女、くちおし。子などいてきて、かしずき愛したる、心憂し。男なくなりて後、尼になりて年よりなるありさま、なきあとまであさまし。いかなる女なりとも、明け暮れ添い見んには、いと心づきなく、にくかりなん。女のためにも半空にこそならめ。よそながら、時どき通い住まんこそ、年月経ても絶えぬなからいともならめ。あからさま（ひよっこりとつぜん）に来て、とまりるなどせんは、めずらしかりぬべし。

ということは、現代の男女の自由な時代と違ふところが多いが、男は結婚して家庭生活を営むのはやめよ。「ずっと独りぐらしで」などときくと奥床かしい。

誰その聳になった。これこれの女を妻にして同棲している、平凡な女を、いい人だと思つているなどと知ると軽蔑したくなる。また美人であれば、可愛がつて「我が仏」とあがめ奉つていゝのではないかなどと思われる。まして、良妻賢母などといわれるのなどはいやなことである。

夫が亡くなって尼になり老いたりしたのは、恥さらしだ。どんな女でも、明け暮れ一緒に暮らしていたら、気に食わないこともあり、女にとって不安であろう。

だから、ふだんは別居して、たまにちょっと来て泊るなどするのは清

新たな感がするであろう。

本文を繰返したようになったが、かなり男女、夫婦生活に対して、少し俗に近い内容だが強烈に言い放っている。(橘教授は美的生活論者の弊を極端に發揮した論であると評している)

これに近い内容を述べたのは第二百四十段の文である。やや難解と思われる所もあるので、かいつまんで記す。

人目を忍ぶ恋も、とかく気かけながら、闇にまぎれて密会しようとしても、見張りの目がうるさい……というような女に強いて通うという命がけの恋愛などは、心深くしみこんで忘れ難い事柄も多いであろう。が、また、そちらの親兄弟が許して、堂々とお嫁さまとし迎えたようなのは、いささか正視しにくいに違いない。それから、生活に苦しむ女が、似合わない老法師とか、よくもわからない東の人であつても、金持ちというのに心がひかれて、「そちらにお志があるなら」などと言うのを、仲に立った人が、双方に心引かれるように言つて、知られも知りもしない女を迎え入れたということになると、ひどく座のさめた話となる。

こんな場合に、何を話の緒口にすべきかも考えられず、バツのわるいことであろう。これとは違って、長い間、忍耐して「こうなるまでは、ともに苦労したなあ」などと、互に話しあうのであれば、いつまで話しても盡きることはなからう。

総じて、媒人口による結婚は、気まづいことが多いように思われる。相手の女の身分がよいような場合でも、女の方からは身分も低く顔も醜く、その上、年令も相当になっていような男は、自分のような者のために一生を犠牲にするはずはない。何かわけがありそうだと、女に対して卑しめの心もでて来たり、自分の立ち場に劣等感が高じて、

女と対い合っているのも、自分の影法師に向つてさえ、気のひけることできまづい次第であろう。

春の一夜、梅花の香わしいおぼる月の下に佇んだり、宮中のお庭の露わけのぼる有明の空をながめても、身の上に思い出の種もないような人(つまり身分低く面貌風姿もよくなく、男女の情事に適する資格を持ち合せない人)は、へたに男女の情趣ある生活行動などには這りこまないのがもつとも無難なことである。……

この段も仲人結婚を排し、恋愛結婚をよいとする情趣趣味の主張である。

右の第九十段第二百四十段は、男女の情趣生活を同じような心構えで述べたものである。

六、異聞・奇聞

やはりこれも特異な物語りである。

第七十三段に、小野小町が事、きわめて定かならず。衰えたるさまは、玉造をいう文に見えたり。云々

とあつて、出羽の郡司(地方官)の娘で、妾女として宮中に仕えた。

仁明天皇のころの人、和歌六歌仙(平安時代初期の勝れた六人の歌人。在原業平僧正遍照小野小町文屋康秀喜選法師大伴黒主)の一人、秋田美人の先祖(?)ともてはやされ、郷土秋田県では非常に人気が高く、近代、秋田県産米に「あきたこまち」新幹線急行名「こまち」、女性の美人の代名詞であることは、今日でも通用していると思う。兼好の時代には既に詳細な行跡は漠然としたように思われる。小倉百人一首に、「花の色はうつりにけりないたずらに、わが身よにふるながめせしまに」

と加えられているのは周知の通りである。

以下二つの段を加えておきたい。そろそろ真実味に欠けるような単純な噂話になっていようだが、やはり女性に属することとして。

第四十段。因幡の国に、何の入道とかやという者のむすめ、貌よしと聞きて、人あまた言いわたりけれども、このむすめ、ただ栗のみ食いて、更に米のたぐいを食わざりければ、「かかる異様のもの、人に見ゆべきにあらず」とて、親、許さざりけり。

兼好は、世間の噂さを耳さとく筆にしているようだが、これもその一つである。これも現代ならどう見るであろうか。文中「見ゆ」は嫁となる意味である。

なお第五十段には、巷間に流布している噂話を記したものである。

應長の頃（兼好の二十九〜三十歳のあたり）伊勢の国より、女の鬼になりたるをいて（引きつれて）のぼりたりという事ありて、そのころ二十日ばかり、日ごとに京白川の人、鬼見にとて出でまどう。（うろつき歩いていた）

「きのうは西園寺に参りたりし、けようは院へ参るべし、ただ今はそこに」など言いあえり。まさしく見たりという人もなく、虚言と言う人もなし。上下ただ鬼の事のみ言いやまず。そのころ、東山より、安居院の辺へまかり侍りしに、四条より上さまの人、皆北をさして走る、「一条室町に鬼あり」とののしりあえり。今出川の辺より見やれば、院の御棧敷（上皇が加茂祭を見られるために、一条通りに常設してあった）のあたり、更に通り得びようもあらず立ちこみたり。はやく（全く）跡なき事にはあらざんめりとして、人をやりて見するに、おおかた

あえる者なし。暮るるまで、かくたち騒ぎて、はては鬪争おこりて、あさましきことどもありけり。そのころおしなべて、二三日人のわづらう事侍りしをぞ、かの鬼の虚言はこのしるしを示すなりけりという人も侍りし。

とある一件である。さすがの兼好も、事件の珍らしさに、やや興奮気味で街中の騒ぎに巻き込まれた感じがする。「人をやって真偽のほどを確かめたり。」「市民が二三日発熱でもしたのか、病んだことがあったが、鬼の噂がその前兆であつたらしい」などという巷の人々の話を受け売りしたりして、珍しく市民の一人らしい感想を記している。

伊勢の女性が鬼になって京に上つたという内容は全く不問で、京に上つた後の鬼の行動も噂だけで、兼好も、タシカに見たという話もない請け売りの態度で、独特の行文である。

私はこの一段を読んで、このような三面記事的な内容を今日の記者たちなら、どんな文章で構成して読者に供給するであろうかと、ふと感じた。「女」の文字がたった一字しかないが本篇に加えたけれども、私の興味は、むしろ兼好の行文の魅力である。似たような架空の話があつというまに巷間庶民の隅々まで傳わって、きわめてマジメにそれからそれへと広がり、数日〜数十日でその噂話は跡形もなく消えてしまう事柄は、そう珍らしいことではないが、この文の起承転結は、何となく魔ものの誘導に引かれて読み終えたという感じ受けていた。

また、第二百三十八段、訝しい女の挑戦（？）について、今一話を記しておこう。この分類に加えるほどではないと思うが、兼好自身にとつては一種の自慢話に加えているものである。「御隨身（お伴として貴人につき従う者）近友（有名な騎手だった由）が自讃七箇条書き出めてあり、皆馬芸。させることなき事どもなり。そのためしと思いて自讃の事七つ

あり。」と書き出して、いろいろの自慢話を記しているが、その七つめにあるもので、いささか記しにくい感じのする話題だが、こと女性にかかわる、現代でもありそうな、しかも兼好自身にふりかかった好ましくない、言ってみれば妙な事件、公卿殿上人たちのいたずらに過ぎないが、場所がらは、一種の奇聞に属するものと言えよう。

二月（お釈迦さまの亡くなられた日。この日はお寺ではご法会が催される）十五日、月明き夜、うちふけて、千本の寺（大報恩寺）に詣でて（法会に参加した）うしろより入りて、ひとり、顔深くかくして聴聞し侍りしに、優なる女の、姿、にほい、人より異なるが、（人を）わけ入りて（私の）膝に居かかれれば、にほいなど、移るばかりなれば、便あしと思ひて、すり退きたるに、なお居寄りて、同じようなれば、立ちぬ。その後、ある御所さま（お局方）のふるき女房の、そぞろごと（むだ話世間ばなし）言われしついでに、「むげに色なき人におわしけり（はなはだ冷たい方でした）と、見おとし奉る（見下げ申す。ダメな男さんと）ことなんありし。情なし（無粋なお方）と恨み奉る人なんある」と、のたまひ出したるに、「更にこそ心得侍らね」（一向に何のことかわかりません）と申してやみぬ。この事、後に聞き侍りしは、かの聴聞の夜、御局の内より、人の御覧じ知りて、侍らう女房を、つくり立てていだし給ひて、「便よく（うまくいば）ば、言葉などかけんものぞ。その有様参りて申せ。興あらん」とてはかり給ひけるとぞ。

と、お局の方のいたずら計画で、志操堅固の兼好がどんな反応をするかをテストされたのだと後でわかったという話である。日は涅槃會（お釈迦さまのお誕生日の法会）時は夜更、聴聞者は善男善女多数、所は寺院のうす暗がりの大講義室、いたずらをするには、かなり条件が揃って

いる、当代の知識人兼好が、このような環境にどう自身を処置するか、などがうち（お局の中）で話題となつて……こんなことも宮内には珍らしいことではないのでなかったか。テストされたわけだが、兼好にとっては、あとになってその計画を聞き知り、どんな心持ちであつたらうか。自讃の中に加えているのを見れば、不愉快ではなかったと思うが、ここは私はそれ以上に立ち入らないことにする。香気馥郁たる、いわば怪しげな女人につきまとわれて兼好は、危うく誘惑の手を逸れたと言つては礼を失するかも知れない。煩わしい変り者だぐらいで避けたとすればさすがであり、お局の方々のいたずらは、いささか度を越えた行爲と思うが。

七、若さというもの、幼ないものへのまなざし

男女の大分類と係わりなく、いずれ通らなければならない共通のものは幼少、青年（若さ）老耄なので、しかもこの順序は一定で何人（ナニヒト）といへども自由に変更することは、絶対に不可能な生物としての宿命である。そのような、どうにもならないことを心に留めながら、つれづれ草の「老人」について前号で駄筆を弄したが、その中に、第七十二段は、その男女を問わず廻ってくる若さから老耄までの心身の変容に対処して、どんなことが若き時代の、また老者の心得か説いているかを載せておいた。女性にとつても逸れがたい経過と心得を説いているので参照されたい。

さて兼好はお寺で養育されている稚児については数段残しているが、幼女については次の一が特記されている。

第六十二段、延政門院、いときなくおわしましける時、院へ参る人に、御ことづけとて、申させ給ひける御歌、

ふたつもじ牛の角もじすぐなもじ

ゆがみ もじとぞ 君はおぼゆる

こいしく思いまいらせ給うとなり

というのである。前後説明を要するが、以前、今は延政門院様と申し上げる方が（御嵯峨天皇の第二皇女）、幼ないころに、今の院（御嵯峨天皇・父君）に差上げた歌で恋しく思われたのを、譬えことばを駆使して綴ったおもしろい表現を兼好が、好意をもって記録したものであろう。「いとよなき」とは、「幼ないころ」だが年齢はさだかではないが珍らしい段である。

幼児に対する終りの関心は、本書最後の第二百四十三段の記された兼好自身の思ひ出話である。

八つになりし年、父に問いていわく、「仏はいかなるものにか候うらん」という。

父がいわく、「仏には人のなりたるなり」と。また問う、「人は何として仏にはなり候うやらん」と。父また、「仏の教えによりてなるなり」と答う。また問う、「教え候いける仏をば、なにがおしえ候いける」と。また答う、「それもまた、さきの仏の教えによりてなり給うなり」と。また問う、「その教えはじめ候いける第一の仏は、いかなる仏にか候いける」という時、父、「空よりや降りけん。土よりや湧きけん」と言いて笑う。「問いつめられて、え答えずなり侍りつ」と、諸人に語りて興じき。

父（治部少輔つらぶく兼顯かねあき—次官つぎ従五位）は相当の顯職にあったことや、兼好が三人（男子）兄弟の末子であったことは明らかであるがこの親子の年令は、今明らかにできないが、本書の末尾に記されたこの文から見ると筆を描くころ、しめくくりとして記したものである。無邪気な

少年初期八歳における父への質問は、尋常ではない、かなり優秀な能力を持っていたことが明らかである。さすがの父上も、この幼ないわらしの質問に手を挙げて、一本参ったことを知友との話題としていたことを傍で聞いていたのか。多少誇らし気な父の満足ぶりがうかがわれると同時に、兼好自身も、多少は鼻うごめかした筆の運びと感じている。書き止めは、男の親子の会話になったが、幼童のことばが、しめくくってくれたのである。

以上